日露青年交流事業

参加者の声

（2016 年版）

日露青年交流センター

Японо-Российский центр
молодёжных обменов

（はじめに）

日露青年交流センターでは、1999 年の事業開始以来、短期招聘・派遣事業等を通して日露の青年交流を図る様々なプログラムを実施してきました。

本冊子では、2016 年に実施した主要な招聘、派遣プログラムの概要及び同プログラムに参加した方の感想を紹介しています。日露青年交流事業に関心のある方にぜひ、ご一読願いたく、この度本冊子を作成しました。

（左）エカテリンブルク日露青年フォーラム参加者（右）サンクトペテルブルク弓道・文化交流

（日露青年交流センター設立の経緯）

1998 年 11 月、日露首脳会談（小渕総理、エリツィン大統領）において日露間の国民レベルの人的交流を抜本的に拡充することで合意し、1999 年 5 月、両国の政府間協定に基づき国際機関として設置された日露青年交流委員会の事務局として日露青年交流センターが設立されました。
2008 年 4 月、両国首脳（福田総理、プーチン大統領）は日露合わせて毎年 500 名規模の日露青年交流を実施することで合意しました。

2012 年にこの目標が達成されたことを踏まえ、2013 年 4 月、日露首脳会談（安倍総理、プーチン大統領）で両国間の青年交流の一層の拡大を支持しました。

そして、2016 年 12 月の日露首脳会談（安倍総理、プーチン大統領）では、大学間交流、青年交流、スポーツ交流を拡大するとともに、地域間交流を活性化し、日露関係の更なる発展につなげていくことで一致しました。

日露青年交流センターは、日露青年交流委員会の決定に基づき、
⑴ 短期招聘・派遣事業、⑵ 日本語教師派遣事業、⑶ 若手研究者等に対するフェローシップ供与事業を主な事業として、1999 年 7 月の事業開始以来、2016 年末までに約 5,700 名の日露の青年交流を実施しています。

（派遣）

・チェス・将棋相互交流　（ 3 月　6 日～ 3 月 12 日）…… 1
・日・サンクトペテルブルク高校生交流　（ 3 月 28 日～ 4 月 4 日）…… 2
・ソチ女子サッカー交流　（ 3 月 9 日～ 3 月 21 日）…… 3
・ブラゴヴェシチェンスク コスプレイヤー交流　（ 5 月 31 日～ 6 月 7 日）…… 4
・サンクトペテルブルク弓道・文化交流　（ 6 月 13 日～ 6 月 21 日）…… 5
・エカテリンブルク日露青年フォーラム　（ 6 月 14 日～ 6 月 19 日）…… 6
・ウラジオストク・愛知　サンボ・相撲交流　（ 6 月 30 日～ 7 月 7 日）…… 7
・ヤクーツク サッカー交流　（ 7 月 5 日～ 7 月 17 日）…… 8
・サハリン・北海道先住民フェスティバル交流　（ 8 月 4 日～ 8 月 10 日）…… 9
・サンクトペテルブルクなぎなた・文化交流　（ 8 月 9 日～ 8 月 17 日）…… 10
・日露学生合気道交流　（ 9 月 8 日～ 9 月 16 日）…… 11
・北極分野における若手研究者交流　（10 月 10 日～10 月 14 日）…… 12
・持続可能な社会構築のための大学間交流　（10 月 11 日～10 月 16 日）…… 13
・オレンブルク・愛媛文化交流　（10 月 29 日～11 月 3 日）…… 14
・日・エカテリンブルク学生交流　（11 月 11 日～11 月 17 日）…… 15

（招聘）

・イルクーツク合気道交流　（ 2 月 23 日～ 3 月 1 日）…… 16
・シベリア地域日本語履修大学生交流　（ 4 月 12 日～ 4 月 19 日）…… 17
・福岡ラグビー交流　（ 4 月 26 日～ 5 月 6 日）…… 18
・北海道・東北観光情報発信事業　（ 5 月 22 日～ 5 月 29 日）…… 19
・日本語学習青年交流　（ 7 月 5 日～ 7 月 12 日）…… 20
・第 15 回サッポロ未来展　（ 8 月 6 日～ 8 月 13 日）…… 21
・日・サンクトペテルブルクポップカルチャー交流　（ 8 月 8 日～ 8 月 16 日）…… 22
・ファッション・服装デザイン交流　（ 8 月 30 日～ 9 月 6 日）…… 23
・ロシア正教関係者交流　（ 10 月 1 日～10 月 10 日）…… 24
・日本語履修大学生交流　（10 月 18 日～10 月 25 日）…… 25
・日本語履修高校生交流　（11 月 1 日～11 月 8 日）…… 26
・広島日露青年フォーラム　（11 月 29 日～12 月 6 日）…… 27

（派遣）

チェス・将棋相互交流（3 月 6 日～3 月 12 日）

派遣人数:11 名

（概要）

2014 年 8 月に実施された「チェス・将棋相互交流招聘プログラム」の答礼プログラムとして、日本の学生 11 名を派遣し、モスクワ大学を中心とするロシアの学生と共に、将棋・チェス二種競技大会を行いました。当プログラムにはご厚意により羽生善治名人も参加されました。

（参加者の声）

ロシア人学生は驚くほど将棋を理解していたが、周りに対戦相手がいないことが悩みだと語ってくれた。そんな彼らの力になりたいと考えた私は帰国後も連絡を取り合い、ネット将棋道場で積極的に彼らとさすことにした。私が今かかわっているロシアの学生チェス・将棋プレーヤーは 10 人にも満たず、まだまだ草の根だが、いずれネットでも日本・ロシアの学生がチェス・将棋を通じて気軽に交流できる日が来るかもしれない。どのような形であれ、今後も将棋の世界への普及をはじめ、日露の相互理解のお手伝いができればと考えている。

（一橋大学　岸本 昂大）

チェスと将棋の二種競技は非常に刺激的でした。ルールの近いそれらを交互にプレーすることで、純粋に知的好奇心を満たすことができました。渡航前にチェスの勉強をしていたものの、それは十分なものではなく、私が良いチェスを指せたかどうかは疑問符がつくところです。しかし期待していたように彼らの思考過程をある程度理解することはでき、感想戦では相手の思考と自分の思考が一致していたことを確認できた時はとても嬉しかったです。

（東京大学大学院　谷下 道大）

日・サンクトペテルブルク高校生交流（3 月 28 日～4 月 4 日）

派遣人数：16 名

（概要）

サンクトペテルブルク 83 番学校（バラの学校）に日本人高校生グループ 16 名を派遣しました。高校生たちはバラの学校で日本語を学ぶロシア人高校生と交流し、授業への参加、プレゼンテーション、合同劇などを行いました。文化学習として、ドストエフスキーゆかりの地の散策、バラライカの演奏体験、プリャニキ（ロシアのジンジャークッキー）作りなどを行ったほか、ホームステイを通じ現地の生活を体験しました。

バラの学校 HP

バラの学校 HP

（参加者の声）

今回このプログラムに参加して、ホームステイ先や学校などで、多くのロシア語とロシア文化に身近に触れることができました。驚いたのは、日本語を一生懸命に勉強してくれていたことです。私ももっとロシア語を勉強したい、そして日本のことをもっと伝えたいと思いました。

（東京都立北園高等学校　村上　比菜）

現地で、ホームステイすることで、全身でロシアの文化を感じることができました。また、バラの学校の生徒と触れ合うことで若い世代の私たちがこれからどのように付き合っていけばいいかを考えることができました。今回の交流で、私たちは多くの刺激を受け、忘れられない経験をしました。

（松本県ヶ丘高等学校　山本　雄大）

ソチ女子サッカー交流（3 月 9 日～3 月 21 日）

派遣人数:17 名

（概要）

筑波大学の女子サッカー部員 17 名を、ソチで行われた国際女子サッカー大会「クバンの春」へ派遣しました。また、学生たちはソチ 15 番ギムナジウム（小中高一貫校）、ロシア国際オリンピック大学を訪問し、現地青年と交流しました。

（上）サッカー大会「クバンの春」の様子（左下）ギムナジウムの学生と一緒にダンス（右下）茶会の様子

（参加者の声）

この遠征を通して一番感じたことは、世界はつながっているということである。ロシア人選手とのおしゃべりはとても盛り上がった。お互いあいさつ程度の言葉しか分からないが、英語やジェスチャーを駆使し楽しい時間を過ごすことができた。（筑波大学　森 春奈）

12 日間のロシア遠征を終え、やり切ったという達成感がありました。この「クバンの春」大会を通して、同年代の他国のサッカー選手と関わることができ、いろいろな文化や考え、国民性を知ることができ、世界は広いと感じました。（筑波大学　武者 桜子）

オリンピック大学では世界各国から集まった学生がスポーツマネジメントについて学んでいた。何人かの学生の話を聞いたが、皆熱心で考えがしっかりとしており、私ももっと世界に目を向けたいと感じた。15 番ギムナジウムでは日本の文化や言語について学ばれている。日本について私たちでさえ知らないようなことまで勉強していて驚いたのと同時に、日本について興味がもたれていることがうれしかった。（筑波大学　井上 愛）

ブラゴヴェシチェンスク コスプレイヤー交流 （5 月 31 日～6 月 7 日）

派遣人数：10 名

（概要）

ブラコヴェシチェンスク市 160 周年イベントに日本人コスプレイヤー10 名を派遣しました。参加者は現地のコスプレイヤーたちに協力しステージでのパフォーマンスやパレードを行ったほか、コスプレに関する意見交換、プレゼン発表、衣装やメイクのワークショップを行い、交流を深めました。

（上）ブラゴヴェシチェンスク 160 周年イベント（左下）ロシア側参加者のプレゼン（右下）メイク講座

（参加者の声）

イベントでは、ロシアの若者と一緒にステージに上がり、美しい歌声に合わせ日本人コスプレイヤーたちはダンスや殺陣などを披露しました。ステージに上がった際の皆との一体感は忘れられません。何か一つのことを共に作り上げた達成感はひとしおでした。イベント翌日はコスプレ講習会を開きました。別れの日は、列車が走り出しても追いかけて最後まで手を振ってくれたので、私たちも最後は皆泣いてしまいました。とても特別で、心に残る思い出ができました。

（参加者『ノリコ ザ ヘッジホッグ』さん）

ブラゴヴェシチェンスク市のステージイベントに参加しました。現地のコスプレイヤー、現地の日本語学校の生徒達と一緒にパフォーマンスをしました。 不安だらけだったのですが、他の日本人メンバーとパフォーマンス内容を一緒に考えて、交流時間の間を見つけては練習し、支え合ってやりきることができました。 きっと日本に居たらできなかった貴重な経験をさせていただきました。

（参加者『黒子キキ』さん）

サンクトペテルブルク弓道・文化交流（6 月 13 日～6 月 21 日）

派遣人数:5 名

（概要）

国際武道大学の学生、他５名をサンクトペテルブルクへ派遣しました。サンクトペテルブルク弓道連盟に所属するロシア人弓道家らとの合同稽古を行い、弓道トーナメント大会「白夜～弓道スタイル　2016～」にも参加しました。また、民族衣装体験などをし、ロシアの文化を学びました。

（参加者の声）

弓道の稽古は、アーチェリー場の広場にウレタンで作った仮設安土を置きそこにアーチェリーの的紙を付けて行った。的紙を付けるのはアーチェリーのもので代用し、射位のところはブルーシートを置き立つことが出来るようになっていた。的枠や的紙が不足していたりなど場所や用具に関して支障があったが、メンバーは各自課題を持ち熱心に稽古に取り組んでいた。場所や用具がそろっていなくても弓を引くことができることを実感し、またそれと同時に日本が道場や用具が充実していることに感謝しなくてはならないと感じた。弓道の大会後はみんなで食事会をし、弓道の話やロシアの話をたくさん聞くことができてとても楽しい時間を過ごした。

（国際武道大学　水上 桃歌）

弓道漬けの一日を過ごした後、モスクワの弓道連盟の人達とも交流した。初対面はとても緊張したが、同じ武道の仲間。打ち解けるまでにそれほど時間はいらなかった。大会の開会式を終えて団体戦を行う。私はロシア人一人、日本人二人のチームで優勝した。今まで毎日サンクトペテルブルクの人達とは合同稽古を行ってきたが、ロシアの人達はみんな私の想像を遥かにこえて弓道が上手く、また知識も豊富なので話していても楽しく、夜、行われたパーティーでも話が尽きることはなかった。

（国際武道大学　石橋 隼也）

エカテリンブルク日露青年フォーラム（6 月 14 日～6 月 19 日）

派遣人数:28 名

（概要）

ロシア国際青年センターとの共催で、「オリンピック・パラリンピックでのボランティア活動」、「健康増進のためのスポーツの発展」、「青年政策と教育分野での NPO の活動」をテーマに日露青年フォーラムをエカテリンブルクで開催し、28 名の日本人青年を派遣しました。

（参加者の声）

ロシアは、ソチオリンピックを経験し、国全体でボランティアに関わる優秀な人材育成や青年政策、中でも国際フォーラムの開催や、社会経済発展につながる国際的な青年協力活動に力を入れていることを知りました。国がこのような政策を支援し、次世代を担う若者の人材育成の重要性を学ぶとともに東京オリンピックをひかえた日本でも今後さらに期待される国際化に向けての政策が重要になっていくことを実感しました。

（名古屋外国語大学　河合 朋美）

今回のプログラムでは現地の学生やボランティアの方々と接する時間や機会が多くあり、こういった国際事業を成功させるには人的交流が欠かせないと思いました。オフィシャルな場から少し離れ同じ年齢層の学生と様々な会話で盛り上がったり一緒に観光したりすることで、ロシア人の温かい国民性や性格を垣間見ることができ、ロシアに対して好印象を抱けました。人種も違えば言葉も違う環境でお互いに理解し合おうという気持ちを持って、楽しく交流することこそ本当の国際交流のあるべき姿であり、今回はそれを達成出来たと思います。

（北九州市立大学　内田 友理）

ウラジオストク・愛知 サンボ・相撲交流 （6 月 30 日～7 月 7 日）

派遣人数：8 名

（概要）

ウラジオストク市の女子サンボ・SUMO（相撲）大会に、愛知県の柔道選手 8 名を派遣しました。選手たちは大会に参加し、好成績をおさめました。また、スパスク・ダーリニー市、ウスリースク市でサンボ、柔道を通じて現地青年と交流を深めました。また、民族衣装体験や、ロシアの伝統的な人形作りを通じ文化を学びました。

（上）ウスリースク市でのサンボ公開講座（左下）大会の様子（中下）伝統衣装体験（右下）手作りしたロシアの伝統的な人形

（参加者の声）

私は国際的な活動や交流が好きで、将来もそういった活動をしたいと思っているので、今回の派遣プログラムをとても楽しみにしていました。サンボは、体験したことも見たこともありませんでしたし、相撲は柔道のトレーニングのうちの 1 つとして行ったことがある程度でした。ロシアに行ってみると、サンボや相撲は格闘技であるのに、たくさんの細身の女の子が好んで行っていることに驚きました。サンボ・相撲大会では、緊張したものの思いきり挑むことができました。ロシア勢とも、韓国勢とも、共に全力を尽くすことができ、試合後は友達になって交流しました。言葉は通じないものの、笑顔は万国共通で、すぐに打ち解け、たくさん交流することができました。

（中京大学 中島 萌花）

スパスク・ダーリニー市では、現地のサンボの選手と交流し、コーチに知らなかった技を丁寧に指導して頂きました。練習後は宿泊所にいた子どもたちとバレーボールをして交流しました。ウスリースク市の小学校でも交流会を行い、サンボを教わるばかりではなく、柔道の技を教えることもできました。文化面では、伝統音楽を楽器を使って演奏したり、それに合わせて踊ったり、伝統的な人形を作ったりしました。ロシアの文化に触れることができてよかったです。

（愛知県立三好高等学校 石黒 佑奈）

ヤクーツク サッカー交流 （7 月 5 日～7 月 17 日）

派遣人数：17 名

（概要）

サハ共和国で開催された国際青少年スポーツ大会「アジアの子どもたち」に、北海道コンサドーレ札幌のユースチームに所属する 17 名を派遣しました。メンバーは、極東、キルギス、シベリア、サハ、の 4 チームと試合を行ったほか、博物館への訪問、青少年との交流を行い、当地の文化を学びました。

（左上）表彰式の様子（右上）試合の様子（左下）表彰状と賞品を持つサハの少女たち（右下）開会式の様子

（参加者の声）

まず、開会式がとても印象的でした。五輪に出ているかのように感じられ、選手たちの間で「さあ、やるぞ」とモチベーションが上がりました。サッカーでは、活躍した選手の周りには大勢の人が集まってきたりしたことが印象的でした。サハ料理にはトナカイの肉、刺身などが振舞われ、トナカイの肉が印象的で、とてもおいしかったです。パーティーではサハの儀式も行われました。サハ伝統の遊びや余興、ダンスなどをみんなで楽しみました。サハの人たちは、交流すればするほどやさしく、いい人たちばかりだと感じました。大変充実した遠征となりました。

（北海道コンサドーレ札幌　井川 空）

ボランティアとして多くのロシアの人たちがチームをサポートして下さり、何一つ不自由なくサッカーに集中することができました。外国人である自分たちに対し、ここまでベストを尽くしてもらえることに有難く感じました。博物館では、マンモスや永久凍土、サハでは昔から馬などの動物を大切にすること、たくさんの意味のある首飾りをすることなども学びました。サハ共和国のよさ、人々の温かみをたくさんの人に知ってもらえるように努力したいです。

（北海道コンサドーレ札幌　鴨川 寛也）

サハリン・北海道先住民フェスティバル交流 （8 月 4 日～8 月 10 日）

派遣人数：10 名

（概要）

アイヌ民族の歴史や文化を研究している、札幌大学「ウレシパクラブ」のメンバー10名をユジノサハリンスクに派遣し、サハリン州文化・公文書省所属民族芸術センター主催による現地でのコンサート及び先住民フェスティバル「生きる伝統」に参加し、現地在住の先住民族や、青年との交流を行いました。

（上）他の民族グループと　（左下）演奏の様子　（右下）上河さんと、仲良くなった現地の男の子

（参加者の声）

コンサートに参加した北方先住民の中に小学生くらいの子供もいて、私は大学に入ってからアイヌ文化を学び始めたので、小さいころから自分の文化に触れている姿を見て羨ましく思いました。北方先住民伝統文化祭で私たちは樺太アイヌの衣装、トンコリ、三線、ムックリ、本などを展示したり、弾き方をジェスチャーと英語でなんとか伝えました。アイヌ文化に興味を持って下さっていると思うと、とても嬉しく、アイヌ文化をもっと広く伝えていけるよう頑張っていきたいと感じました。　（札幌大学　上河 彩）

大学入学以降３年間アイヌ文化を学び、同時に伝承活動も行っています。同じ北方民族ということもあり、言葉や楽器、衣服など、さまざまな共通点があったサハリン先住民族やその文化についてとても関心を持っていました。特にエヴェンギ族の楽器や歌謡について直接聞くことができ伝統文化や現代的な音楽の表現への思い入れなどが強く伝わり自身のアイヌ文化の更なる学びと発信に対して意識が今まで以上に強くなり、とても感慨深い時間を過ごすことができました。　（札幌大学　川上 さやか）

サンクトペテルブルクなぎなた・文化交流 （8 月 9 日～8 月 17 日）

派遣人数：7 名

（概要）

サンクトペテルブルク剣道・居合道・なぎなたクラブ「ザンシン」に、中村学園女子高等学校の学生を中心とした福岡県のなぎなた選手 7 名を派遣しました。なぎなた交流、料理や茶道などの日本文化体験のほか、メンバーはホームステイを通じ、現地の人々と交流しました。

（参加者の声）

一番印象に残っているのは、なぎなたの稽古のことです。初めて外国の方になぎなたを教えたので最初はとても大変した。ジェスチャーでは伝わらないこともたくさんあり、不安がとても大きかったです。けれど、日に日に一緒に稽古していくことでなぎなたを教えるには言葉だけでなく、自分がやってみせて行動すれば相手に伝わるということを実感することができました。そして私も、外国の方と一緒に練習することで基本を見直し、自分の弱点や技の良いところを見つけ出すことができました。

（中村学園女子高等学校　辻田 理奈）

現地では三家庭でのホームステイ生活で、市民生活を体験することができました。なぎなた交流に関しては、互いに母語ではない英語でのコミュニケーションでしたが毎日向上が見受けられました。学校法人中村学園からなぎなた 10 本を寄贈し、現地の方々に感謝して頂きました。寿司作りと茶道体験では、緊張を伴う武道の日程の中で、和やかで楽しい交流を行うことができました。　（福岡県なぎなた連盟　角 薫）

日露学生合気道交流 （9 月 8 日～9 月 16 日）

派遣人数：20 名

（概要）

専修大学、立正大学、金沢大学、早稲田大学の合気道部の学生 20 名を、サンクトペテルブルクの「セイメイ道場」と、モスクワの「モスクワ大学武道クラブ」に派遣しました。学生たちは稽古と演武を行ったほか、ロシア人学生たちとの市内散策などを通して交流を深めました。

（参加者の声）

ロシア人と日本人で、国も人種も価値観も違う私達ですが、ただ合気道という点においては、稽古に火がつき思わずロシア語や日本語が出てしまっても、相手が何を伝えようとしているのか1つでも多く読み取ろうとしました。ここがこの遠征で私の学んだ最大のことかもしれません。相手の伝えたいことを言葉を越えて読み取ろうと努力する、それは紛れもない合気道のように思います。合気道は常にあるという師匠の言葉の一端を理解できたような気がしました。右も左も分からない遠いロシアの地で初めて本当の合気というものが少しだけ見えたように思います。 （専修大学　長田 昇悟）

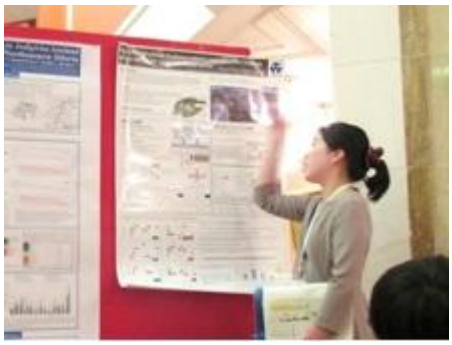
偶然日本人として生まれた私が、「日本独自の」などという枕詞のついた合気道に対して抱く思いと、偶然ロシア人として生まれた彼らが、自分自身とは縁のない様な異文化の合気道に対して抱く思い、との間に横たわる恐ろしい程の温度差。たまたま日本人として生まれて、合気道を非能動的に享受している私を、日本人だからという理由で歓待してくれた、私以上に熱心ではないかと思われるロシア人合気道鍛錬者に対して、一種の恥ずかしさ、申し訳なさを覚えた。彼らと合気道をすることが出来たのは、自らの合気道に対する思いを再認識するいい機会だった。こうした貴重な機会を提供してくれた、あまたの人々に感謝し、その感謝の意を込めて、更なる精進をしていこうと思う。 （早稲田大学　金丸 駿）

北極分野における若手研究者交流（10 月 10 日～10 月 14 日）

派遣人数：10 名

（概要）

モスクワ・ロシア科学アカデミーで行われた「日露若手北極研究者会議」に、名古屋大学、大阪府立大学、信州大学、福島大学、東北大学、福島大学、海洋研究開発機構より研究者 10 名を派遣しました。北極合同研究への展望、日露の北極における協調関係強化について協議されたほか、情報交換のためのネットワークが形成され、今後の共同研究に向けた第一歩となりました。



（参加者の声）

2 日間を通して日露の若手研究者が、質疑応答を通して互いに意見・情報交換をすることができた。何人かの研究者からは、自らの日露研究協力の経験や今後の展望が述べられ、個研究者間の共同研究から大学や国のプロジェクトなどいろいろな形での研究協力についての可能性が議論された。今後の日露間での研究協力を進めるために、とくに若手研究者の役割を高めていくために何をすべきか意見を出し合った。現実的には研究資金と人材の確保に日露双方とも苦戦しているが、今回得られた人脈を利用してこのような集会を継続して行うことや、メーリングリストでの情報交換を行うことから協力を始めることとなった。また、市内視察の際には学生生活、趣味、文化、政治経済などについてもお互い話すことができ、お互いの理解を深める一端となった。

（名古屋大学　小谷 亜由美）

地球環境問題に関する策を講じるためには、地球環境変動への理解を進度化させるばかりではなく、人間社会（それは文化や伝統を含む）にかなり踏み込んだ研究との融合が必要不可欠であることは言うまでもない。私は東部ロシアを対象に自然科学と人文社会学の融合による問題解決型の環境研究の創生に取組んでいる。本プログラムのような取組みの継続的発展は、周北極域を対象とした日露両国の環境研究を発展させるための喫緊の課題のひとつと言えよう。積極的な人的・研究交流を通して、隣国同士である日露の友好関係が絶え間なく発展することを願ってやまない。

（海洋研究開発機構　永井 信）

持続可能な社会構築のための大学間交流（10 月 11 日～10 月 16 日）

派遣人数：15 名

（概要）

ハバロフスク市・太平洋国立大学で行われた「都市部における生態環境の再生の近代技術」をテーマとした会議に武蔵野大学、東京外国語大学の学生 15 名を派遣しました。日露の大学生たちが発表を行ったほか、記念植樹を行いました。また、同大学研究所や、市内のエコロジーセンター等を視察しました。

（上）発表を熱心に聴く学生たち　（左下）日露学生で協力して記念植樹　（右下）植樹後の記念撮影

（参加者の声）

極東地方での森林伐採の深刻化の現状、それに対する地方が行っている対策、アムール川の生態や、子供たちへの環境学習の充実さなど学ぶことはとても多く、日本とは気候帯が異なっているが、資源豊富と思われているロシアも多くの対策を講じていて、日本も参考にする部分が多いのではないかと感じた。日本とロシアの環境へのアプローチという新たな視点から現地学生との交流を深めることができた。

（東京外国語大学　吉田 梨乃）

私が最も興味を持ったのは、市内の子供たちを対象に自然保護に関する教育を行っている「ハバロフスク市営児童施設エコロジーセンター」である。楽しみながら環境について学ぶことができ、一部を除き無料で授業を受けることができるという。エコロジーセンターの教育活動は環境問題だけでなく生態系など、広い領域にわたり行われており、日本の施設も参考にできることが多くありとても勉強になった。この経験を生かしてより一層、自分が行っている環境プロジェクト活動に生かしていこうと思った。

（武蔵野大学　原田 海）

オレンブルク・愛媛文化交流（10 月 29 日～11 月 3 日）

派遣人数：5 名

（概要）

オレンブルク国立大学文化フェスティバル「オレンブルク日本の日」に愛媛県の文化交流グループのメンバー5名を派遣しました。グループはオレンブルクとモスクワで、日本語を学ぶ学生と交流しました。「オレンブルク日本の日」では三味線と和太鼓のミニコンサートや和食紹介をしました。また、現地の高校で和楽器の紹介や折り紙のワークショップを行いました。

（参加者の声）

郷土芸能の津軽三味線や和太鼓の演奏会や現地の若者たちとのワークショップ、愛媛県の紹介、伝統的な食文化の五色そうめんの調理を一緒に行うなどの交流ができました。私にとってロシアを訪れること、さらに演奏をさせていただくこと、様々な交流や政治的な会談への参加など容易にできないようなことをたくさん経験させていただきました。大学生の私にとって、異国の地で同世代の人のみならず普通ならお会いできないような方とお話ができたことはとても有益な経験でした。

（津軽三味線と和太鼓だんだん　名本 ハンナ）

オレンブルク国立大学では愛媛県フェアが開催され、演奏をしました。演奏が進むにつれて、皆さんの体が音に合わせて動き始めるのを感じつつ、ロシア民謡の「カリンカ」を織り交ぜると、気づいた方から、順に自然と手拍子が起こり、日本の楽器が奏でる音がロシアの方たちに伝わった瞬間だったように思いました。

（津軽三味線と和太鼓だんだん　堀尾 泰磨）

日・エカテリンブルク学生交流（11 月 11 日～11 月 17 日）

派遣人数：10 名

（概要）

関西地区の大学生 10 名をエカテリンブルクに派遣しました。現地では、ウラル連邦大学で日本語を学ぶ学生との交流・ホームステイを行いました。プレゼンテーションや、伝統文化の体験などを通じ、日露の文化について学びました。

（上）ウラル連邦大学で日本語を学ぶ皆さんと（左下）日本語学習者によるエカテリンブルグの紹介（右下）ホームステイの様子

（参加者の声）

ロシアは日本を大変強く意識していると感じた。日本の文化に対する興味が強く日本を知りたいという気持ちが強くあるようにみえた。だが日本でロシア人と交流する機会が全くないように、ロシアでも日本人と交流することは困難である。お互いの文化を知り、尊重し合うことで両国の未来が明るいものになるのではないかと期待した。私にとってロシアは特別な国となった。そしてエカテリンブルクの友人に会いに何度でもまた訪れたい。

（立命館大学　小林 海斗）

外国人と関わるときに自分の行動が日本全体のイメージを形作るということを強く感じた。最終日のフェアウェルパーティにて、ロシア人の皆さんが私の誕生日を祝ってくださった。そのとき私はとても幸せな気持ちになり、ロシアのことが好きになった。ロシアという広い国の一部の場所、人々と関わっているだけなのにロシアのことが好きになり、いつか帰ってきて恩返ししたいとすら感じた。エカテリンブルグの方々は私のロシア全体のイメージを形作った。これは逆にもまた当てはまる。日本に興味のない人に興味を持ってもらい、日本を訪れたいと思ってもらうために、日本全体の人々が意識することで「一度日本に行ってみたい」というような憧れられる日本になるのではないかと感じた。

（同志社大学　浅野 友毅）

（招聘）

イルクーツク合気道交流（2 月 23 日～3 月 1 日）

招聘人数：10 名

（概要）

イルクーツク合気道連盟に所属する青年 10 名が、合気道師範による稽古を受けました。山中湖畔で日本人学生と合同合宿し稽古を行ったほか、都内散策をし、交流を深めました。また、茶道体験を通じ日本文化を学びました。

（左上）合気会本部道場にて（右上）山中湖村にて日露合同稽古（左下）茶道体験（右下）山中湖にて

（参加者の声）

合気会本部の先生方の私たちに対する接し方が印象に残りました。先生方は、すぐに間違いを直すのではなく、受講生を手伝うような態度で接してくださいました。

（イルクーツク　グレベンシコヴァ エレーナ）

今回のプログラムのすべてがとても面白かった。日本文化はとても印象深かった。初めは慣れないものでもすぐに慣れた。和食もとても気に入った。東京の街並みの、生き生きとした姿が印象的だった。すべてが好印象だったので、また日本に来たいと思う。

（イルクーツク　ゴロヴァノフ ロマーン）

プログラムの内容はとても面白く、大変ためになる経験となりました。日本人参加者は親切で、皆気遣いをしてくれました。この訪日のことを忘れません。

（イルクーツク　ソロキナ エカテリーナ）

シベリア地域日本語履修青年交流（4 月 12 日～4 月 19 日）

招聘人数:7 名

（概要）

クラスノヤルスク市在住の、日本語履修経験のある青年 7 名を招聘しました。愛知県立大学、名古屋外国語大学、千葉大学を訪問しました。また、寺社見学、和太鼓などを通じ、日本文化を学びました。

（上）三州足助太鼓体験（左下）名古屋外国語大学での着付け体験（右下）香積寺での抹茶体験

（参加者の声）

とてもよいプログラム内容で、忘れられないくらい印象深いできごととなりました。新しい友人もでき、もっと日本をたくさん見て、よく知りたいと思いました。ロシアに帰ったら日本が恋しくなると思います。もう一度日本に来たいと思います。（シベリア連邦大学　リ ヂロラム）

学生との交流、着付け体験、大学の授業、お寺の訪問など、すべてがよかったです。プログラムすべてがとてもよく準備されていて素晴らしかったです。

（シベリア連邦大学　シュコルヌィ アレクサンドル）

着物を着ての食事、香積寺での読経、徳川美術館の美しさ、和太鼓などがとても印象的だった。すべてが素晴らしかった。（シベリア連邦大学日本センター　エフィモヴァ エカテリーナ）

福岡ラグビー交流（4 月 26 日～5 月 6 日）

招聘人数：30 名

（概要）

福岡県に、ラグビーのロシアユースチーム「エニセイ STM」のメンバー30 名を招聘しました。チームはワールドラグビーユース大会に参加した他、宗像（むなかた）市在住の中・高生、大学生と交流し、同市の歴史や自然、日本文化について学びました。

（上）参加者集合写真（左下）お互いの言語で自己紹介（右下）東福岡高校との試合

（参加者の声）

宗像市在住の学生はロシア語ができないため、お互い英語でコミュニケーションを取っていました。彼らにとっては言葉が通じないことが大きなストレスになることを実感するとともに、一生懸命理解しようと耳を傾けてくれるロシア選手の姿に感動していたようです。学生との交流中、ロシアの選手たちは、試合中のグラウンドでは見せない笑顔を見せ、体は大人と同等またはそれ以上ですが、まだまだ青年である姿を見せていました。ロシアでラグビーはマイナースポーツでありながら、大きな体を利用した力強いラグビーを世界中のラグビー関係者に見せてくれました。

（サニックススポーツ振興財団　渡邊 敏行）

北海道・東北観光情報発信事業（5 月 22 日～5 月 29 日）

招聘人数：10 名

（概要）

北海道および山形県の観光情報をインターネット上などで発信してもらうことを目的として、ハバロフスク地方の青年 10 名を招聘しました。北海道では、札幌大学への訪問、帯広での農業体験などを行いました。山形県では、山形大学、東北芸術工科大学、の青年と交流したほか、さくらんぼ狩り、居合道体験、水耕栽培や酒蔵の視察などを行いました。

（右上）山形大学訪問（左下）さくらんぼ狩りの様子（右下）居合道体験

（参加者の声）

農場、酒蔵、さくらんぼ狩り、水耕栽培など、伝統文化と関係のある歴史的な場所と、現代生活を感じさせる場所とを訪問できたのが素晴らしかった。

（歴史研究者　コレスニコフ アレクセイ）

素晴らしい人々と出会うことができた。この出会いが、友情に発展することを望んでいる。たくさんの思い出があるので、私の日本への愛情を知人や友人に伝播させたい。日本について多くの点で考えが変わり、自分自身の「国境を広げた」と思う。少しでも多くの人に、私の感激や感動を伝えていきたいと思う。

（IF Media　ゴルプ マリヤ）

日本語学習青年交流（7 月 5 日～7 月 12 日）

招聘人数:20 名

（概要）

ロシア人青年間での対日理解促進を目的とし、ロシアで日本語を学ぶ青年 20 名を招聘しました。グループは東京都と岩手県を訪れ、都内視察、岩手大学学生との懇談を行ったほか、さんさ踊り体験、東日本大震災被災地訪問、盛岡市近郊の企業訪問などを行いました。

（上）岩手大学さんさ踊り同好会と　（左下）同大学学生と懇談（右下）トヨタＬ＆Ｆ(株)訪問

（参加者の声）

東京のにぎやかな通りを見る事も、岩手県の静かな生活を楽しむこともできました。岩手大学では、まじめにロシア語を勉強している学生たちを見て嬉しくなりました。さんさ踊りに参加できたことも、盛岡八幡宮に行ったことも面白かったです。友好的な雰囲気で大学生としゃべったりする事によって日本文化が分かりやすくなりました。

2011 年の大地震と津波で被害を受けた地方を見る事に無関心の人たちはいませんでした。日本の国民の勇気と忍耐力に感心しました。こんなに酷い事は二度と起きないように希望しています。今回の交流プログラムに参加したことで、すてきな思い出ができ、日本語の勉強を続けて日露関係を広げる希望が強くなりました。

（ハバロフスク 3 名　マンシリナ アナスタシヤ、セルポワ アントニナ、ムン エレーナ）

夢を実現し、美しさに触れる機会を与えていただいたことに対し、心から感謝したいです。私はこれから一生懸命日本語の勉強を続け、また、友人知人が日本の文化・芸術そして日本全体に興味を抱くように働きかけ続けます！

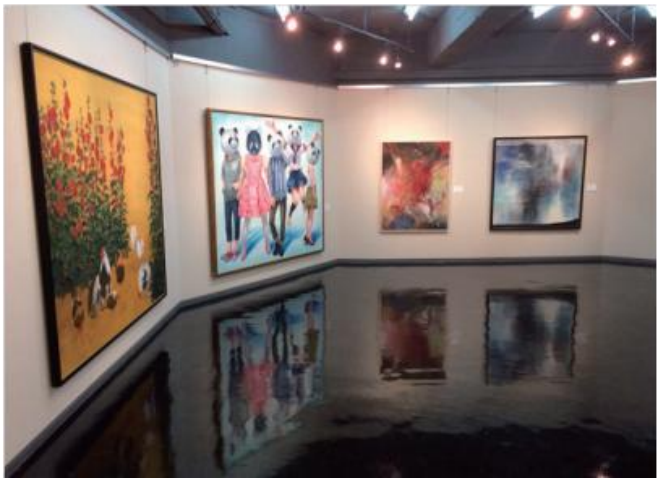
（ウラジオストク　イヴァノフ ヴァレンチン）

第 15 回サッポロ未来展（8 月 6 日～8 月 13 日）

招聘人数:7 名

（概要）

サッポロ未来展は北海道の若手画家が、2001 年より活動を続けている美術展です。2015 年にサハリンで開催した第 14 回サッポロ未来展の答礼事業として、札幌で開催された第 15 回サッポロ未来展にサハリンの美術家 8 名を招聘し合同展示を行いました。また、赤れんが庁舎にて公開トークイベントの開催、札幌市や小樽市の視察などを行いました。



（上）北海道庁表敬訪問（左下）共同で行った展示作業（右下）参加者作品

（参加者の声）

特に良かったのは、札幌西高校と北海道教育大学への訪問です。札幌西高校では、カリキュラムや美術教育のレベルの高さに驚かされました。将来的に、合同写生会ができたらと思います。

（ロシア美術家同盟 2 名　アサビナ リュドミーラ・キム アレクサンドラ）

訪れたすべての場所がとても良かったです。北海道の美術館や博物館はとても気に入りました。札幌と小樽について詳しく知りたいと思いました。

（サハリン美術カレッジ　ナセトキナ ダリヤ）

博物館見学、札幌市内視察はたいへん良い経験となりました。今後の協力と、経験交流に期待します。

（サハリン美術カレッジデザイン課課長　ジョ ソンエン）

日・サンクトペテルブルクポップカルチャー交流（8 月 8 日～8 月 16 日）

招聘人数：７名

（概要）

2015 年、サンクトペテルブルクのコスプレイベント AniCon にポップカルチャーグループを派遣した答礼として、AniCon メンバー7 名を招聘し、デジタルハリウッド大学および、慶応大学にて意見交換、メイド喫茶の体験勤務、アニメ制作スタジオ見学、コミックマーケット参加、アニメの舞台となった鳥取県岩美町でアニメファン交流などを行いました。

（左上）コミックマーケット展示ブース（左下）2015 年日露交流事業参加者と（右）アニメの舞台となった田後（たじり）神社にて

（参加者の声）

日本を訪問する機会を下さり、本当にありがとうございました。通常の旅行では訪問できなかったような場所に行くことができ、とても嬉しかったです。様々な場所、都市、砂丘、自然などを見ることができてとても幸せです。初めての日本訪問を生涯忘れません。

（AniCon デザイナー　スモルドヴァ エカテリーナ）

アニメスタジオ、アフレコスタジオ、雑誌編集部への訪問からは、自己実現のためのインスピレーションを受けることができました。日本の文化遺産に触れる機会を下さりありがとうございました。これからも日本やポップカルチャーについてもっと学び、今回知り合った人々との交流を続けていきたいと思います。

（㈲Galaktika　ズヴォロヴァ タチヤナ）

ファッション・服装デザイン交流（8 月 30 日～9 月 6 日）

招聘人数：10 名

（概要）

ハバロフスクから、服飾文化を学ぶ大学生・若手専門家 10 名を東京都および金沢市に招聘しました。文化服装学院および金沢文化服装学院の日本人学生との交流や服飾などの文化に関する意見交換、ファッションショーの視察、友禅染め体験などを行いました。

（上）金沢文化服装学院の皆さんと（左下）友禅染め体験（右下）金沢市の重要伝統的建造物群保存地区であるひがし茶屋街にて

（参加者の声）

金沢、ファッションショー、文化服装学院などで、短期間で日本について多くのことを知ることができた。素晴らしいところを訪問できた。日本の独自性を感じることができた。日本の青年と交流することができ、日本が好きになった。

（Ile de Beaute 社 美容スタッフ　ラティポヴァ ダリヤ）

プログラムは充実していて面白かった。日本の学生との交流は、言葉の練習になってとてもよい経験になった。モスクワやノヴォシビルスクのウェブデザイナー仲間とシェアできるような、仕事に役立つ刺激をたくさん得ることができた。

（Web デザイナー　ザコモルナヤ ダリヤ）

ロシア正教関係者交流（10 月 1 日～10 月 10 日）

招聘人数:9 名

（概要）

ロシア正教の聖職者グループの 9 名を初めて日本へ招聘しました。ニコライ堂、聖アレクサンドル・ネフスキー大公聖堂（目黒）、京都ハリストス正教会、函館ハリストス教会、トラピスト修道院への訪問、龍谷大学、國學院大学での日本の宗教関係者との意見交換などを行いました。また、ウラジオストクに本校のある、極東連邦大学函館校にてロシア語を学習する学生たちと交流しました。

（左上）函館ロシア人墓地（右上）函館ハリストス正教会（上）極東連邦大学函館校の皆さんと

（参加者の声）

プログラムは大変良く考えられ、首尾よく実施されました。ただただ感謝の気持ちしかありません。神のご加護がありますように。我々のグループにとっては、正教会の聖体礼儀に参列することが特に貴重な体験となりました。今後、日本における正教会の多様な面をよりよく知ることが出来ればと思います。

（モスクワ 2 名　カルガノフ アンドレイ、ルービン マクシム）

日本では最も大切なことはお互いを尊敬するということだと知り、大変感銘を受けました。日本各地の名所をもっと歩いて見て回りたいと思いました。

（モスクワ　アフォニナ リュボフィ）

日本語履修大学生交流（10 月 18 日～10 月 25 日）

招聘人数：40 名

（概要）

ロシア各地の大学で日本語を学ぶ学生 40 名を日本へ招聘しました。神戸学院大学で行われた「第 2 回日露アニメ・オタク文化学生サミット」に参加した他、同大学にて茶道やゆかた体験をし、姫路では日本舞踊体験をしました。また、兵庫県・圓教寺(えんぎょうじ)にて写経、座禅、宿坊体験を行いました。

（左上・左下）アニメオタクサミットの様子（右上）圓教寺で写経体験（右下）日本舞踊体験

（参加者の声）

この素晴らしい国に滞在し長年の夢をかなえる機会をいただいたことに対して感謝している。これで私の人生は訪日の「前」と「後」の二つに分かれ、「日本に行きたいという希望」が生きていく上で不可欠なことへと変化した。

（エカテリンブルク　マルィギナ　ヤーナ）

日本の伝統や、近代文化の潮流についても触れることができ、この驚くべき国について多くの新しいことを知った。たくさんの日本人学生と交流し、友達もできたことが最も良かった。日本の若い人たちは、対話のできる人たちで、ロシアの学生と変わらず、ロシアと日本の関係が一層強くなっていくことを望んでいることを知った。私もこのためにできる限りのことをしたい。

（サンクトペテルブルク　サイフェルト　イリーナ）

私は日本に来るのはもう二回目なんですが、その時、東京と横浜を見ましたから、大都市のイメージだけ記憶に残りました。今回は神戸に行って、自分にとって新しい日本の特徴を見つけました。圓教寺に行ったのは一番面白かったと思います。

（リャザン　ラザレヴァ　アンナ）

日本語履修高校生交流（11 月 1 日～11 月 8 日）

招聘人数：50 名

（概要）

ロシア各地で日本語を学ぶ高校生 50 名を招聘しました。日本人高校生と共に都内散策を楽しみ、茶道・書道・三味線、空手などの日本文化体験をしました。青森県では、三内丸山遺跡、十和田湖、ねぶたの家の視察、奥入瀬渓谷散策などを行いました。早稲田大学高等学院、都立北園高等学校、青森南高等学校で日本人高校生と交流しました。

（左上）ワ・ラッセねぶたにて（右上）都立北園高校にて（左下）県立青森南高校にて（右下）早稲田大学高等学院にて

（参加者の声）

美しい自然、夕焼けの富士山がとても気に入った。今後の自分の人生を日本と結びつけることになるかもしれない。今後も日本語の勉強を続ける。　（サンクトペテルブルク　アレクサンドロフ ダニール）

同年代の日本人たち、彼らの関心事、学校生活などについて知ることができた。この滞在の感想や日本に関する情報をインターネット上に載せ、サハリンの高校生の間で日本に対する関心が維持されるように、友人たちに対し働きかけ始めた。　（サハリン　ボリソワ ポリーナ）

私の思いについて　日本人は伝統的で、知識のある方です。とても親切な方です。深い文化のある方々です。日本の景色は素晴らしいですから、必ず写真を撮らなければなりません。日本人と学生たちに幸運を！お元気で！ロシアのウラジオストクの 51 番目の日本語の学校へ必ず来て下さい。たのしみにしています。

（ウラジオストク　シダレンコ タチヤナ）

広島日露青年フォーラム（11 月 29 日～12 月 6 日）

招聘人数：29 名、日本人参加者：29 名

（概要）

広島市立大学にて「日露青年フォーラム 2016」が開催され、ロシア人 29 名、日本人 29 名が「核兵器及びテロリズムの廃絶のためには何をすべきか。そして世界平和の実現のために日露両国ができる協力とは」をテーマに討論しました。フォーラム終了後、日露の参加者は広島平和記念公園を訪問し平和記念資料館の見学、原爆死没者慰霊碑への献花を行ったほか国立広島原爆死没者追悼平和祈念館にて被爆体験講話を聞きました。

（参加者の声）

テロリズムについてロシア人と日本人とが議論を交わしあえたことが印象に残っている。育ってきた国、母語、社会や文化背景は違うが、英語という言語を使って、皆で世界平和のために自分たちには何ができるかを話し合った。我々が切望する世界共通の課題である“地球の平和”というものに向き合う時、我々は国籍や母語などは考えていなかった。普段、日本人同士で議論をするときと同様、ロシア人が話す時も、日本人が話す時も、皆真剣に耳を傾け、意見を否定することなく受け入れ合った。　（大阪大学　生本 めい）

ロシア人参加者の方々や、広島以外の参加者の方々に、日本の食文化や日常生活（主にロシア人参加者）そして、被爆者4世である自分だからこそ伝えることができる、広島に投下された原爆の悲惨さや戦後から今までの歩み、そして今後の広島としての役割といったものを伝えることができたのではないかと思います。広島市の大学生として求められていた役割は最低限果たすことができたのではないか、そして、他の参加者の方々の広島へのより深い理解に貢献できたのではないかと振り返っている次第です。

（広島市立大学 菱田 将広）

広島という地でロシアの学生と平和について話し合うという事ができたということは非常に貴重な経験で、お互いの平和についての考えや、それぞれ日本とロシアに対する若者のイメージを議論できたことは新鮮だった。今回このような形で真剣に議論を交わしてみると、ロシア人の原爆投下へ対する意見から始まり、私たちが普段あまり考えないような質問を多く投げかけられ、今一度我々日本人側が自分たちの国について考えさせられるような機会が多くあった。

（東海大学　瀬古 龍司）

フォーラムはとても意義のあるものとなったと考えます。フォーラムで出した結果が紙上に残るだけではなく、実現することを願います。このような機会は、日本とロシアの友好関係強化の成功への鍵となると思います。

（オレンブルク・ガスプロム供給会社 エルマコフ エヴゲーニー）

このプログラムに参加し、日本の学生と知り合い、交流し、また、1 つのチームとして活動できたことが非常に良かったです。この交流がさらに発展すればと思います。また、充実した文化プログラムも良かったです。

（グプキン記念ロシア国立石油・ガス大学
エフィモワ クセニヤ）

分科会 B では、テロリズムを撲滅するためにはなにをすべきか、というテーマについて議論しました。様々な意見が出ましたが、なかでもソーシャルメディアを使い、テロリズム撲滅に取組むという案はこの分科会での実りだと思います。具体的には、反テロ的な宣伝をソーシャルメディアで行う、テロリズムについての情報を誰でも得られるように、オンラインライブラリーを構築する、などの案が出ました。

（ペンザ国立建築構造大学　ロマネンコ マリヤ、バイカル国立建築構造大学　リャザンツェフ アルチョム、
チュヴァシ国立大学　シュルトゥコワ ユリヤ等　分科会 B 参加者）

日露青年交流センター

住所：〒105-0003 東京都港区西新橋 1-17-14
西新橋エクセルアネックス 7 階
TEL: 03-3509-6001
FAX: 03-3509-6008

E-mail：info@jrex.or.jp
HP: http://www.jrex.or.jp
Facebook: @JapanRussiaYouthExchangeCenter
Twitter：@jrex_tw

表紙写真

左上：広島日露青年フォーラム、右上：ウラジオストク・愛知　サンボ・相撲交流

左下：サハリン・北海道先住民フェスティバル交流、右下：ブラゴヴェシチェンスク コスプレイヤー交流